

め、授業や会議の忙しい合間に参加していただいた国内の大学の方々も多くあった、とのこと。また参加者には録画・録音を控えていただくようお願いしました。要旨集は事前に公開したのですが、それでも聞き逃した講演を再度聴講したいという要望も多く寄せられました。講

演資料中には著作権に配慮すべき引用図表なども多々あります。今後オンライン化が定着すると、こうした引用の作法のコンセンサスについても再確認が必要となるかと思えます。

本研究会を開催するにあたり、様々な方からご助言をいただきました。

また素敵なデザインのウェブページ [https://sites.google.com/ims.ac.jp/uvSOR-ws2020/home] や要旨集を研究力強化戦略室の永園さんに作成いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

国際研究協力事業報告

二国間共同研究シンポジウム

報告：計算科学研究センター 教授 江原 正博

令和2年8月20-21日に二国間共同研究（日本－ノルウェー）のシンポジウム「Japan-Norway Bilateral Symposium from Fundamental Chemistry to Porous Materials: Theory and Experiment」を開催しました。このシンポジウムは、JSPS二国間交流事業共同研究プログラム「錯体超分子構造体の理論化学」の一環として開催したものです。当初、本年6月にノルウェーのオスロ大学にて、JSPSノルウェー同窓会と合同開催する予定でしたが、コロナ禍の影響のため、オンライン（Zoom）で開催することになりました。

本共同研究事業では、錯体超分子構造体であるMetal-Organic-Framework (MOF) や Metal-Macrocyclic-Framework (MMF) の構造と機能に関して、理論と実験が共同で国際研究を推進しています。昨年度は、7月18日に分子研でオープンセミナーを開催し、8月22日にオスロ大学を訪問してシンポジウムを開催しており、本共同研究を進めるとともに、学术交流を行っています。これらの国際研究交流をさらに進め、理論と実験の新しい国際ネットワークの形成を目指しています。

今回のシンポジウムでは、実験と理論の双方からこの分野で最先端の研究を推進している9名の研究者（日本7名、ノルウェー2名）から発表がありました。化学結合から超分子構造体、表面触媒など幅広い研究課題に関する最新の結果が報告され、活発な議論がなされました。参加国は日本、ノルウェー、フィンランドの3ヶ国で、6～7時間の時差がありますので、シンポジウムは2日間の日程をとり、両日とも15:30～18:30の時間帯で実施しました。国内外から著名な研究者の参加があり、特に理論化学分野では、オスロ大学・Hylleraasセンター長 Trygve Helgaker 教授、ヘルシンキ大学の Pekka Pyykkö 教授にもご参加いただき、活発な議論が行われました。欧州側では外出制限もあり、自宅から接続する方もおられ、質疑の際に音声が届かないこともありましたが、日本側ではネットワークの大きな接続障害もなく、無事にシンポジウムを開催することができました。

昨年度に現地開催で実施したシンポジウムでは、共同研究の議論と研究交流



Hylleraasセンターの展示：計算量子力学のパイオニア

ができました。今回のオンライン開催でも、現地開催と異なり、時間的な負担も少なく、共同研究や研究交流をさらに進めることができました。本国際交流事業は、来年度まで延長することを申請中で、来年度にはコロナ禍の情勢が改善していることを期待しています。今回の経験に基づいて来年度以降もシンポジウムを開催して共同研究および研究交流をさらに深めること、そして、今後さらに二国間の学术交流が進展することを期待しています。その一環としてオスロ大からも分子研、京大、理研との共同研究を進める予算申請がノルウェー研究評議会に対して行われており、本国際研究交流を一層発展させていきたいと考えています。